



[ブーケ]

bouquet



[ブーケ]

bouquet



復興応援企画 人とまちと、 その先と—

明日を生きる糧となることを信じて

公益財団法人 音楽の力による復興センター・東北



石巻市立蛇田小学校避難所で開催された復興コンサート（2011年4月）

「復興応援企画」として被災地の現在をお伝えする本連載の第7回は、
地域再生のための希望の灯をともしつことを目標に、被災した方々のもとへ
生の音楽を届け続けるセンターをご紹介します。

被災地にこそ、音楽を

2011年3月11日、かつてないほどの被害をもたらした東日本大震災は、私たちから多くの大切な存在を奪い去りました。誰もが言い得ぬ喪失感に押しつぶされそうな中、仙台フィルハーモニー管弦楽団と宮城県仙台市の市民の有志は、「音楽の力による復興センター」を立ち上げ、演奏会の開催に乗り出します。震災からわずか2週間という大混乱のさなかでした。祈るような思いで紡がれた音楽に皆が聴き入り、涙や安堵の表情を浮かべ、その時間だけは「失った感情を取り戻すことができた」と語る方もいたそうです。この演奏会を経て、音楽の力に確かな手応えと希望を見出し、広域での継続的・発展的な活動を展開するためのプラットフォームとして、現在の「音楽の力による復興センター・東北」が誕生しました。

センターは、演奏家などの支援者と被災者をつなぐ中間組織としての役割を担い、さまざまな復興活動に携わっています。岩手、宮城、福島避難所や仮設住宅を中心に多様な形式の演奏会を手掛けてきたほか、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の被災地支援や、

学校教育現場にプロの音楽家を派遣する文化庁の芸術家派遣事業などとも協働して、被災地に音楽を届けてきました。震災直後に始まった「復興コンサート」は累計1,100回を超え、音楽を通じた復興支援活動は、現在も年間80公演以上行われています。



宮城県仙台市で行われた第1回復興コンサート（2011年3月26日）

歌うことを生きる力に

みやぎの「花は咲く」合唱団



復興センターでは演奏を届けるだけでなく、共に音楽を奏でることを通して、被災者の心の支えや新たな居場所をつくることにも取り組んでいます。その一つが「みやぎの『花は咲く』合唱団」です。「仙台フィルと一緒に歌ってみたい」——。復興コンサートを聴いた方からのつぶやきをきっかけに、仙台市宮城野区の仮設住宅や津波浸水地域にお住まいの方々が集い、2013年にこの合唱団が結成されました。団員の多くは合唱経験のない60歳以上の方でしたが、結成の2年後には仙台フィルの弦楽合奏と『花は咲く』の演奏が実現、その力強い歌声は多くの被災者を勇気づけました。今も月1〜2回の練習を継続し、年に一度コンサートを開催しています。



みやぎの「花は咲く」合唱団によるコンサート（2025年3月）

Message

講師 **齋藤 翠** さん(ソプラノ歌手)

結成当初から合唱団を指導されている齋藤さんに、これまでを振り返っての思いを語っていただきました。



笑顔で合唱指導にあたる齋藤 翠さん

私も団員と同じ境遇だったこともあり、復興センターの方から講師のお声がけをいただき、キーボードを抱えて小さな仮設住宅を回ったのが始まりでした。震災から間もない頃は暗い表情の方もいましたが、みんなと歌って声を出すうちに少しずつ元気になっていく姿を見てきました。練習を重ねるにつれて声にも磨きがかかり、今はみんなと歌える喜びや表現することの楽しさを覚え始めています。コンサートでは目の前のお客様が喜んだり拍手してくださったりする様子にも励まされますし、またお客様が合唱団の歌声で励まされることもあり、そうしたお互いのエネルギー交換がこの先もずっと続くといいなと思っています。

Interview

音楽が寄り添うとき、 15年続く支援のかたち

復興センターの役割や活動理念について、「音楽の力による復興センター・東北」コーディネーターの伊藤み弥さんと千田祥子さんにお話を伺いました。

— コーディネーターの役割について、教えてください。

伊藤：復興センターは被災地支援に協力してくださる音楽家と被災者をつなぐ役割を担っています。演奏会の企画にあたり大事にしているのは、押し付けにならないようにということです。復興コンサートはこちらが一方向的に開催するものではなく、聴き手の心の準備が整ったら、音楽を聴きたい人がいたら、届けに行くというのが基本姿勢です。そのため、依頼が来たらまず

はコーディネーターがその場所まで行って、日時や演奏会の内容、聴き手の年齢層や周辺地域の様子などを伺って情報を集めます。それをもとに、今度は音楽家と相談しながらプログラムなどを準備していきます。

千田：私は元々コンサートホールでの実務経験がありましたが、ここでの役割は何もかもが違いました。求められている場所に音楽を届けに行くことをセンター発足当初から大事にしましたが、求められたところ



最近の復興コンサートの様子(2026年1月東松島市)

と言っても仮設住宅の集会所だったりするので、そこにいる全員が聴きたくて来ている人とは限らない。それでも足を運んでくださる方の前で、一体どんなプログラムで、どんな演奏で、どんな言葉で語りかけるのか。やはり届ける側がきちんと考えをもってその場に立つ覚悟が求められます。クラシックの演奏家が来るだけで緊張される方も多いため、どれだけリラックスしてその時間を楽しんでいただくか、その場に行っても何ができるかを考えながら準備することは、劇場でお客様を待っているのとは全く違いましたね。

— 被災地の声をくみ取ることが大事なのですね。プログラムにはそれをどのように反映されていますか？

伊藤：事前打ち合わせでリクエストがあれば、それは可能な限り盛り込んだり、それぞれの世代や地域に身近な曲(たとえば歌謡曲や民謡など)も演奏家をお願いして取り入れていただいたりしています。そういった特別な曲以外は、主にクラシック音楽や日本の唱歌を取り上げています。これは復興コンサートを始めた頃から変わっていないですね。

千田：人気の歌謡曲やJ-POPもよいのですが、いわゆるメッセージソングはときに人を傷つけることがあります。言葉ってすごく強くて、被災後の疲弊した心ではつらくて消化できない方もいらしたんですね。

伊藤：そうしたときに、言葉のないクラシック音楽や、山や川など日本の風景を淡々と歌う唱歌が、聴く人の心にすっと入り込んで、日常のつらさを一瞬忘れてたり、昔を思い出したり、自分の時間、安全な時間を確保できたりするんです。現場を知っているからこそ届けられるものがあると感じました。

千田：特に唱歌は子どもからシニアの方まで一緒に歌うことができる、世代共通の貴重な財産ですよね。

— 震災から間もなく15年を迎え、当時を経験していない子どもたちも増えています。この活動を通して伝えたいことはありますか？

千田：震災を語り継ぐことももちろん大切ですが、その一方で、この時間だけは日常から離れて、美しいものに触れて純粋に楽しんでほしいという思いもあります。当センターの役割には、そうした一生に一度かもしれないような音楽体験を届けるということも一つあると感じています。

伊藤：そうですね。こちらから何かメッセージを発信するのではなく、聴いてくださる方に寄り添える活動でありたいですね。やはり15年も経つと、「震災」という言葉を使うことに否定的な声もあります。それでもまだ癒えない傷は確かにあって、そういう人のもとに音楽をできる限り届けたいと思っています。

— あらためて、お二人が思う「音楽の力」とはどのようなものでしょうか。

千田：どんなときも、そこにいていよと肯定してくれるものだという気がします。コンサート後に「生きていてよかった」とおっしゃってくださる方がいます。それほどに特別な何かができただかは分かりませんが、そう言わせてしまう音楽はやっぱりすごいなと。感情が動くということは、生きていることを思い出すことでもあると思うんです。

伊藤：究極はそこなのでしょうね。楽器でも歌声でも、音を鳴らすとその場の空気が揺れて、それが聴いている人の体に伝わる。ある意味で、それが生きていることの確認になるのだと思います。このセンターでは、ほんとうに小さな形で音楽を届けています。演奏家が目の前で自分のために演奏していることを感じられる、この身近な距離感が大切で、そこで生まれる空気感はデジタル技術にはまだ再現できない部分だと思います。



千田祥子さん(左)と伊藤み弥さん(右)
演奏会等の現場でも温かな雰囲気づくりを大切にされているという

最新情報は公益財団法人 音楽の力による復興センター・東北のウェブサイトからご覧いただけます。▶▶▶

<https://ongaku-fukko-tohoku.jp>



上野耕平の
CROSSING [クロッシング]

第23回

予土線車内コンサート



©坪内政美

高知県と愛媛県を結ぶ予土線。四万十川沿いを走る風光明媚な車窓が大変魅力的な路線だ。単行のディーゼル車がトコトコ走るその姿もファンを魅了する。窪川駅～江川崎駅間は1日に4往復しか運行されない。

そんな予土線を盛り上げようと「予土線利用促進対策協議会」が沿線自治体を主として組織されている。今回はJR四国の皆さん、協議会の皆さんのご協力もあり、私の車内コンサートを含む特別臨時列車「予土線シンフォニー号」を運行していただいた！ 普段は予土線に入線しないキハ185系を用いての運行。地元の方はもちろん関東などからもお客様が訪れ、予土線の魅力と音楽を楽しんでいた。普段演奏する楽曲も予土線のゆつたりとした車窓と共に演奏すると、自ずと落ち着きのあるテンポ感になるのが自分でも驚き興味深い体験だった。車掌アナウンスもさせていただき、鉄道好き音楽家としてはこの上ない幸せを享受した1日だった。



文：上野耕平（うえの・こうへい）

東京藝術大学器楽科卒業。第28回日本管打楽器コンクールサクソフォン部門第1位・特別大賞（史上最年少）。2014年第6回アドルフ・サクス国際コンクール第2位。17年度第28回出光音楽賞、18年第9回岩谷時子賞奨励賞受賞。常に新たなプログラムにも挑戦し、サクソフォンの可能性を最大限に伝えている。The Rev Saxophone Quartet、ばんだウインドオーケストラコンサートマスター。NHK-FM「×(かける)クラシック」の司会やテレビ「題名のない音楽会」「妄想トレイン」など、メディアへの出演も多い。鉄道と車をこよなく愛し、深く追求し続けている。

Information

上野耕平コンサート
情報はこちら▶▶▶



<https://uenokohei.com/concert/>
(上野耕平公式サイトより)

編集部メモ

「予土線シンフォニー号」は
〈予土線×音楽〉をテーマに、
高知県窪川駅～愛媛県宇和島駅間で臨時運行された
コンサート列車である。当日はサクソフォン演奏の他、
地元案内人によるまち歩きツアーや
女子鉄アナウンサー久野知美さんとの
予土線トークなども行われた。



A Finder's Memory

3 枚目

馬

フォトエッセイ

写真・文：津久井 珠美

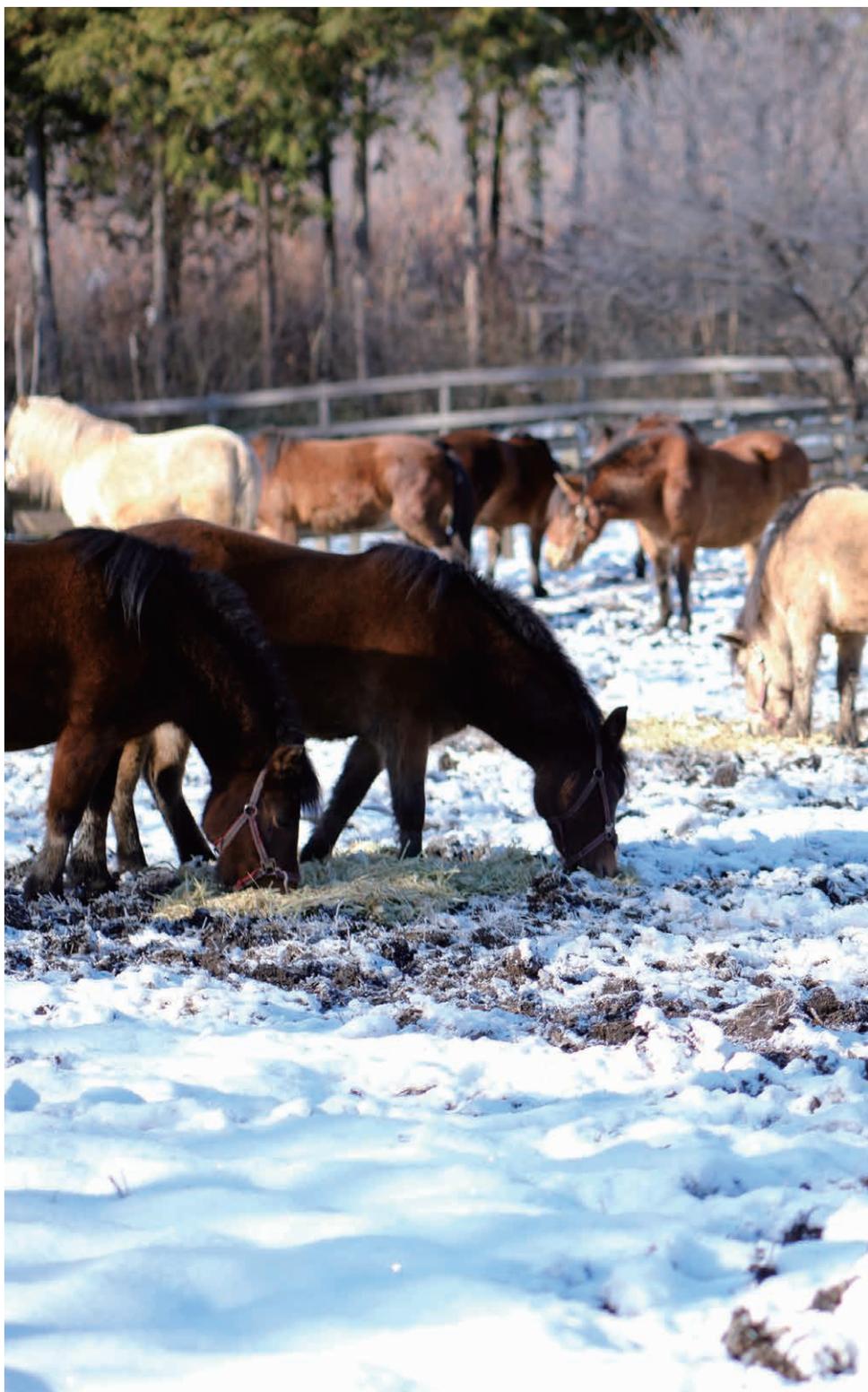
Photo・Text：Tamami Tsukui

昨年12月、偶然にも午年を迎える前に無性に馬に会いたくなった。雪が降ったあとの静かな世界の中で、馬たちは黙々とひたすら草を食べていた。

私は馬と触れ合うのには慣れていないので、かわいさにときめきながらも、彼らの邪魔にならないよう、そっと遠くから小さなカメラを傍らに、眺めていた。

時折、馬が耳をこちらに向けたたり顔をあげたりして、こちらの気配を感じているようだった。

私の存在が邪魔になっていなければいいなと感じながら、私も



気持ちのいい空気の中で、とてもリラックスしていた——
しばらくして、じつと何かの気配を感じているような、少し存在感のある馬が遠くにいるのに気がつき、その気配をゆっくりと写真に収めた。

その馬は遠くを迂回しながら、とてもゆっくりとこちらに近づいてきた。

飲み水のバケツの一つが、私の近くにあったからかもしれない。

それでも、馬と人間の、そんな小さな気配の交流が、しばらく続いていたような気がする。

津久井 珠美

フォトグラファー。立命館大学文学部西洋史学科卒業。在学中、歴史の文脈における芸術や表現に関心を持つ。2000年～2002年、写真家・平間至氏に師事後、雑誌・書籍・広告など幅広い撮影に携わる。現在はクライアントワークと並行し、人物や自然を題材に制作を行っている。京都を拠点に活動。依頼内容に応じて全国での撮影に対応している。

(HP) <https://www.tamamitsukai.com/> (Instagram) [tamamitsukai](#)



の 校
講 長
話 先
生



本連載では、学校長を務められた先生が、これまでに学校で子どもたちに語り届けた講話をご紹介します。

第18回は、元 徳島県美馬市立穴吹中学校校長の横島亜希子先生が、令和6年度の始業式で生徒に贈った式辞をお届けします。人が育つエンパワーメントな学校、そしてわくわくが止まらない学校を目指し、全校一丸となって取り組んだ合言葉が印象的なお話です。

横島亜希子（よこはた・あきこ）
徳島県音楽教育研究会 会長

第18回 横島亜希子 先生（元 徳島県美馬市立穴吹中学校 校長）

特別活動を核とした学校経営

～明日もっとやってみたいことがある学校～

教諭時代、「音楽は学校を変える」をモットーに様々な教育活動を行いました。そうする中で、音楽の行事も含め、学校全体で取り組む「特別活動」の重要性に気づきました。

「特別活動」は、生徒の自主性ややる気を生み、

自分自身に期待し努力できる生徒に成長すると強く感じたのです。

校長になり、取り組んでみたかった「特別活動」を核とした学校経営に着手しました。

毎日わくわくが止まらない学校にするため、まず、生徒も教職員も全員がいつでも言える「合言葉」を作り、学校の玄関に大きく掲示しました。

「明日もっとやってみたいことがある学校」です。

生徒に伝えたいことは、常に集会・校長室だよりで発信しました。

この合言葉を始業式、入学式で発表し、皆でこんな学校を作ろう、と呼びかけました。

生徒会の動きは早かったです。「明日もっとやってみたいことがある学校」を具現化するためにどんなことを実現してみたいか全校縦割り班で話し合い、プレゼンが行われました。

その結果、コロナで1日開催にしていた「穴吹中祭」が2日間開催に決まり、

地域を巻き込んだ生徒主催の手作り感満載の穴吹中祭になりました。

その後も、「生徒心得の見直し」、滋賀県主催の「しが生徒会オンライン交流会」に

徳島県から初めて参加するなど、日頃の生活の中の課題や違和感に気づき、

知恵を出し解決のプロセスを導く練習を、この中学校生活の中で体験していきました。

このように、特別活動の三本柱である、

一人一人に役割があり「自分はみんなから必要とされている」と感じることで、

「自分のことを理解してもらっている」と感じ人の役に立つ喜びを感じられることで、

「自分はやればできる」と自分に合ったハードルを立て、乗り越えられる生徒に成長すること。

これらを信じ日々取り組みましたが、このことが生徒の心にどれだけ響いたのか、

生徒が大人になった姿を見てみたい気がしています。

教育とは種を蒔く仕事ですから……。

式 辞

校長室から見える穴吹の山々を見ますと、山桜の温かなピンク色が新芽の緑と混じり合って心地よいコントラストを作っています。皆さんと同じようにたおやかでいて、そして若い命が力強くあふれているようです。皆さん進級おめでとうございます。

今年度のスタートにあたり、次の二つのことを意識して生活して頂きたいと思い、お話をします。

まず、一つ目は、『自ら気づき考え、変わることでできる自分』になって欲しいということです。

現在、すべての学校にタブレット端末が導入され、デジタル教科書も導入されつつあり、以前と授業スタイルもすっかり変わりました。いつの時代もそこにとどまり、同じということはありませんし、ありえません。

つまり自分に置き換えると、自分に必要だと感じたこと、自分にとってよりよいものは何かをいつも考え、今の自分を変えることでできる柔軟性をもつことが、これから生きていく上で、ますます必要なのです。その練習をこの中学時代にして欲しいのです。

学校生活では、疑問に思ったこと、これは課題だなと感じたことは、誰かに話してみてください。友達に、先輩に生徒会に、先生に。そしてああしてみよう、こうしてみようと考え、知恵を出し、試してください。自分たちでその課題を解決するために案を出し、企画し、実際に取り組んでみてください。明日これをするために学校に行こう、これがあるから話し合おう。そう思って楽しみにして学校に来る、これが今年の合言葉「明日もっとやってみたいことがある学校」の本当の姿です。変われる力、変われる



始業式で「令和6年度の穴吹中の合言葉」を掲げる横島先生



2日間開催となった穴吹中祭の生徒の様子

自分に期待して欲しいです。皆さんの輝く瞳を見ていると、今年も最高の穴吹中学校になると確信せずにはられません。

二つ目は、『人の役に立つ喜びを感じる自分になって欲しい』ということです。今年は今までにも増して、生徒会活動・委員会活動を活発にしてもらいたいと考えています。この活動は、何のためにあるのでしょうか。

それは、もちろん穴吹中学生全員がよりよい学校生活を送るためにあるのです。先ほども話しましたが、クラスや学校の課題を見つけ、それを解決することは、結局自分のみならず、誰かのためになっているのです。人のためになることを進んでする、誰かのためになることをする、これほど尊いことはありません。

自分の考え、アイデアを出したことが形となり、それで穴吹中学生や地域の方が喜んでくれ、生活が潤ったり、心が癒されたりする。それを実行するために、明日これをしよう、あれをしようと思うようになってくる。これも、「明日もっとやってみたいことがある学校」です。さあ、わくわくしてきました。

さて午後からは、新生が入ってきます。入学式では、先輩として、いいモデルになってくれることを願っています。

最後にもう一度今年の穴吹中学校の合言葉を発表します。合言葉は『明日もっとやってみたいことがある学校』です。明日これをやってみたいから学校に来る、そんなわくわくした学校にしていきたいと思います。

令和6年4月8日
美馬市立穴吹中学校長 横畠 亜希子



ホワイトボードとタブレットを使い、建設的な意見を班で出し合い全員でまとめた「生徒心得の見直し」



「自分たちの学校をよりよくするために何ができるか」をテーマに、滋賀県の中学校17校と穴吹中学校で行われた「しが生徒会オンライン交流会」



— SDGs 特集 —

Think Globally, Act Locally

Vol. 7

印刷産業が目指す未来 日本印刷産業連合会

飯島由紀（日本印刷産業連合会 常務理事）

内藤 清（日本印刷産業連合会 GP推進部部长 グリーンプリンティング認定事務局長）

坂本知美（日本印刷産業連合会 GP推進部 グリーンプリンティング認定事務局課長）

三井寛之（TOPPANクロレ株式会社 第3情報デザイン営業本部第3営業部部长）

“Think Globally, Act Locally”——地球規模で物事を考え、身近なところから行動を起こす——。

よりよい未来をつくっていくために、私たち一人一人にできることは何か？

この特集では、さまざまな分野の方にお話を伺いながら、そのヒントを探ります。

第7回は、私たち出版社が深く関わっている印刷産業からお届けします。

前号では教育芸術社の教科書が「2025GP環境大賞（一般印刷の部）」を受賞したことをお届けしましたが、

今号では環境負荷削減を目指して「GP（グリーンプリンティング）認定制度」を創設した、

日本印刷産業連合会の方々（飯島由紀さん、内藤 清さん、坂本知美さん）と、弊社へGPマーク付と
関するアドバイスをくださったTOPPANクロレ株式会社の三井寛之さんにお話を伺いました。

Profile | 一般社団法人 日本印刷産業連合会

1985年に印刷産業10団体により設立された連合会。それまで規模別や工程別などに分かれていた印刷の業界団体を取りまとめる形で発足し、総合的な発展を通じて日本の産業発展と国民生活文化の向上に寄与することを目的としている。現在、会員10団体の加盟会員数は約6,000社となっている。

「つくる責任」の実現のために

bouquet（以下、b）：弊社の教科書は、「グリーンプリンティングマーク（以下、GPマーク）」を導入し裏表紙に示しています。これは日本印刷産業連合会が定めた「グリーンプリンティング認定制度*（以下、GP認定制度）」により環境配慮を担保するものですが、この制度の創設のきっかけを教えてください。

内藤：創設の背景としては、2001年に循環型社会形成推進法およびグリーン購入法**が相次いで施行されたことが挙げられます。それを受けて、同年に印刷産業

界の環境自主基準「日印産連『印刷サービス』グリーン基準」を制定し、2006年に印刷産業の環境負荷削減を目指して「GP認定制度」を創設しました。

b：創設から約20年経ったんですね。

飯島：印刷産業としては、お客様にとにかくたくさんの商品を作っていただくことが重要だった時代があります。情報伝達には紙を使うことがコスト削減になるので、大量に作って大量に廃棄する。それは世界的な課題でした。

b：現在はデジタルの時代のため、世界的に印刷物が減少傾向にありますよね。

内藤：今の時代は、印刷物が減少しているからこそ、

紙で提供すること自体に確かな価値があります。「せっかく紙で提供するのなら、環境に配慮された商品がいいよね」という考えがスタンダードとなるように取り組んでいるのが、GP認定制度です。

b: GP認定制度はSDGsの取り組みにつながる内容ですね。

内藤: SDGsにおいては、主に「目標12: つくる責任、つかう責任」のなかの「持続可能な生産と消費の形態を確保する」の実現に寄与するものです。国が定めるグリーン購入法にも、2025年の4月からGP認定制度について明記され、環境省にも認めていただいたということで、うれしく思っています。

グリーンプリンティング認定制度* 印刷業界のより高いレベルでの環境保全活動を推進するため、印刷工場と印刷製品の総合的な環境配慮を深めることを目標に、日本印刷産業連合会が創設した。環境配慮された印刷工場を認定する「GP工場認定制度」、印刷工場が使用する資機材を認定する「GP資機材認定制度」、認定工場が製造した印刷製品にGPマーク（環境ラベル）を表示できる「GP製品認定制度」の3つの制度より成り立つ。

グリーン購入法** 2001年に施行。国などの各機関が物品を購入する際は、一定の基準に沿って、積極的に環境負荷が少ない商品を選ぶことを推進する法律。

総合的環境配慮マーク「GPマーク」

GP
マーク
の
例



GREEN PRINTING JFPI
P-A50004

b: このGP認定制度で認められた商品や書籍には「GPマーク」を付けることができます。このたび弊社の教科書にGPマークを付与していただきましたが、教科書会社としては弊社が初めてとなるのでしょうか？

内藤: はい、初めてになります。印刷関連の環境マークはたくさんあるのですが、紙の環境や、インクの環境など、工程ごとのマークでした。

b: まさにインク環境では、ベジタブルオイルインキ（植物油インキ）のマークが多くの教科書に付いています。

内藤: GPマークは、材料から納品までのサプライチェーンを含めた全ての工程において環境に配慮したものづくりでないと、付与することができないマークです。

b: GPマークを付けるためには、GP認定制度の基準を満たす工場で印刷していることが第一条件になると聞いておりますが、これは厳しい審査基準を通った印刷工場だけがGP認定工場として、マークの付与を許されているのでしょうか。

内藤: それぞれの製作工程ごとに、紙そのものや紙の加工、製本がどのような原材料を使っているのかという品質を保証するための取り組みが審査基準となって

おり、第三者委員会による検査を経て認定を取得するという流れになります。

b: 印刷物の表紙には光沢感を出すための塗料がのっていますが、実際に提出する審査書類には、その塗料の薬剤が環境や人体にどのような危険性があるのかなどの細かい記載が求められました。もちろん危険性が少ないものを選ぶことが前提ですが、加工や製本に従事する会社はその危険性を十分に把握して使用する、そうした品質保証ができる会社で作っていることがいかに重要であるかが伝わってまいりました。

内藤: はい。さらに一度認定したら終わりではなく、3年に一度の更新審査があります。GPマークの付いた印刷物やパッケージの安全性は継続的に保証されているということです。

未来を見据えた取り組みを

b: 創設から現在に至って、感じる変化はありますか？

内藤: 以前は『タウンページ』など、GPマークの多くが出版物に付いていましたが、最近ではアイスクリームの袋など、商品パッケージにGPマークが付くことが多くなってきましたね。

b: GPマークは社会的に認知されてきましたか？

内藤: 環境について言及されることが多くなってきた昨今、ようやくこのGPマークが認知されてきました。私たちは営利団体ではないため、広報活動に費用をかけることが難しいのですが、このマークのよさを分かってくださる方々は多くいらっしゃいます。

b: 近年は提供する側だけでなく、使用する側でも環境に対する関心や責任感が高まっていると感じています。

内藤: GPマークが付いた出版物や商品パッケージは、累計14億を超えました。

b: よりよい資材を使用すれば、そのぶん費用もかさむので継続の難しさも生じますからね。

三井: 環境への取り組みを意識したい出版社さんは多くいらっしゃるのですが、商品展開を考えたときに、そこまで含めた検討がどうしても難しいという現状はあるようです。

b: どのように品質を保つのかは私たちの大きな課題ですね。弊社では環境に配慮したものづくりだけでなく、音楽の教科書会社として楽曲や教材などにもSDGsにつながる視点を提示しています。子どもたちの未来に向けた幅広い働きかけや取り組みは、会社の姿勢としてこの先もずっと続けていきたいと思えます。

内藤: 幼い子どもたちが教科書に付いたGPマークを目にすることで、大人になったときにGPマークの付いた商品を選んでくれるきっかけになると思います。人々が環境に配慮されたものを優先的に手に取ることが当たり前になるよう、私たちは働きかけを続けていかなくてはなりません。私たちにがんばれることがまだまだあります。



2025GP環境大賞（一般印刷の部）受賞にあたって

教育芸術社は、この度GP（グリーンプリンティング）認定制度において、「2025GP環境大賞（一般印刷の部）」を受賞いたしました。現在発行している教科書『小学生の音楽』『中学生の音楽・器楽』の裏表紙には、「GPマーク（環境ラベル）」が表示されています。

2025年10月15日、GP認定制度の2025年度「GP環境大賞」「GPマーク普及大賞」「GP資機材環境大賞」の表彰式が開催されました。

授賞式の模様（2025年10月15日・出版クラブホール）



教育芸術社
代表取締役社長 市川かおり



「GP環境大賞」受賞に関する情報を公開しています。

取材を終えて

教育芸術社は長年にわたり教科書だけではなく、すべての商品の品質に対して高い意識を磨き続けてまいりました。GPマークが入った教科書を多くの子どもたちに使ってもらい、環境に対する取り組みを幼い頃から身近に感じてもらうことで、私たちのよりよい未来につながっていくというお話を、日本印刷産業連合会の方々からお聞かせいただきました。今回の取材でこのようなお話を伺い、教育面において弊社が果たすべき多様な役割をあらためて実感したところです。

教科書は子どもたちが長期間使い続けるものであるため、できる限りよいものを使ってもらいたいという弊社からの大きな願いがあります。環境配慮を表すこのマークの導入が実現できたことを、非常にうれしく感じております。

（教育芸術社 製作担当 高橋篤史）

SDGs とは？

Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）

の頭文字を取ったもの。2030年までに貧困や飢餓、福祉、教育、エネルギー、気候変動、平和的社会等の課題に対して解決策を見だし、持続可能でよりよい世界を目指すための国際目標です。国連サミットで決められた17のゴール・169のターゲットで構成され、地球上の誰一人として取り残さないことを誓っています。



Contents

- 04 [連載] 復興応援企画 人とまちと、その先とー Vol.7 明日を生きる糧となることを信じて
～公益財団法人 音楽の力による復興センター・東北 伊藤み弥 千田祥子
- 07 [連載] crossing 第23回 上野耕平
- 08 [連載] フォトエッセイ A Finder's Memory 3枚目 津久井 珠美
- 10 [連載] 次代につなぐ 校長先生の講話 第18回 横畠亜希子
- 13 [連載] SDGs 特集 Think Globally, Act Locally Vol.7 日本印刷産業連合会

編集後記

『bouquet[ブーケ]』No.25をご清覧いただき、ありがとうございます。
今号は東日本大震災発生から2週間後に設立された
「音楽の力による復興センター・東北」の取材のため仙台市を訪れました。
震災から15年が経った今、あらためて被災地の方々のお話を伺い、
当たり前にも音楽を楽しめる日常のすばらしさを身に染みて感じました。
また、ほとんどの方が未経験からスタートしたという
「みやぎの『花は咲く』合唱団」の方々の練習風景は、楽しげで明るい雰囲気です。
その生き生きと響く歌声からは、私たちが元気をいただくことになり、
まさに「音楽の力」を実感した取材となりました。
今号のフォトエッセイは京都を拠点に活躍中の写真家、
津久井珠美さんにご寄稿いただきました。
お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力賜りました全ての方に、
心より厚く御礼申し上げます。

Staff

Art Direction & Design(表紙・本文): 中澤美羽
写真提供: 音楽の力による復興センター・東北
DTP: 浅野真理子(マール)
印刷: 新日本印刷
製本: ヤマナカ製本

